

(4) 湖沼の自然

県北部には手賀沼や印旛沼などの湖沼があります。約1000年前（平安時代）は、太平洋から細長く入りこんだ一つの大きな水域で香取の海といました。（図1）

昔、利根川は東京湾に注いでいましたが、江戸時代初期に流路を東に変え、香取の海を通して銚子方面へ流すようになると、利根川から運ばれた土砂のたい積によって手賀沼や印旛沼の湖沼化が進みました。（図2）

かつての手賀沼や印旛沼は、今よりも水面積の広い沼でした。手賀沼の水面積はかつての約2割になり、そのほとんどは水田になりましたが、今も多くの生物がくらしています。沼周辺の環境を①斜面林、②水田・畑、③ヨシ原、④水面の四つに分けて、すんでいる生物たちを見てみましょう。（図3）



図1 約1000年前の千葉県北部



図2 現在の千葉県北部

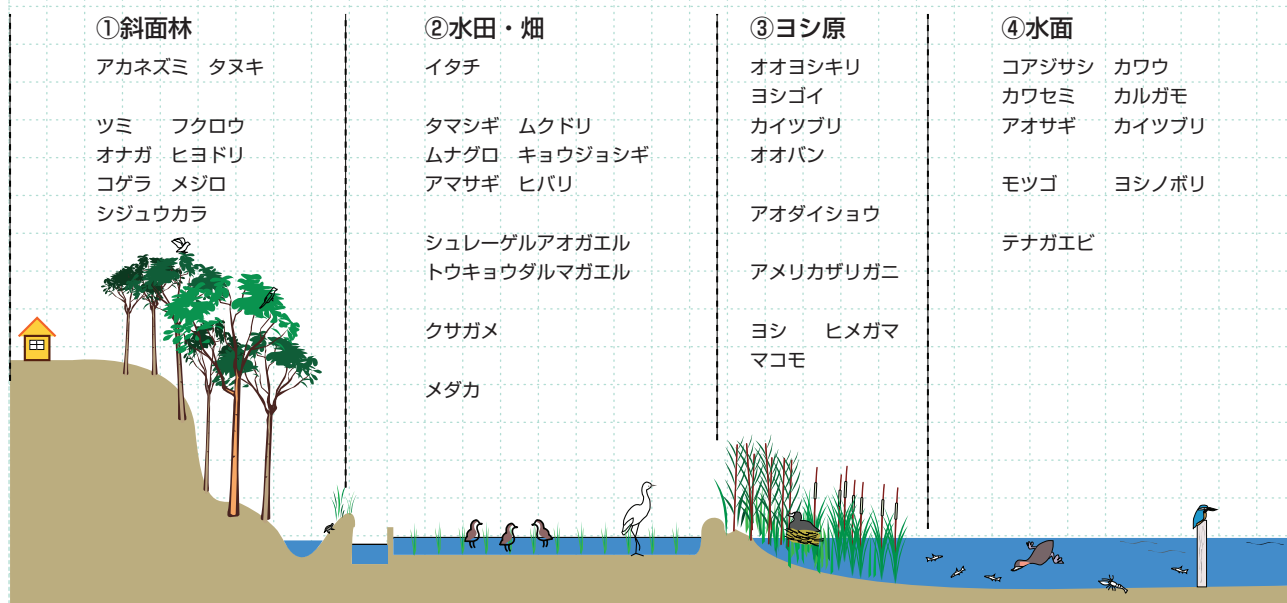


図3 沼周辺環境に見られる生物たち

手賀沼は、沈水植物*を含む水生植物の宝庫でしたが、現在は抽水植物*（ヨシ原とハス群落）のみが生育しています。（図4）また、水鳥など多くの野鳥を見ることができます。水質は沼周辺の宅地化により1970年代から急速に悪化し、湖沼水質の全国ワースト1でしたが、北千葉導水事業の効果もあって、近年改善が見られています。

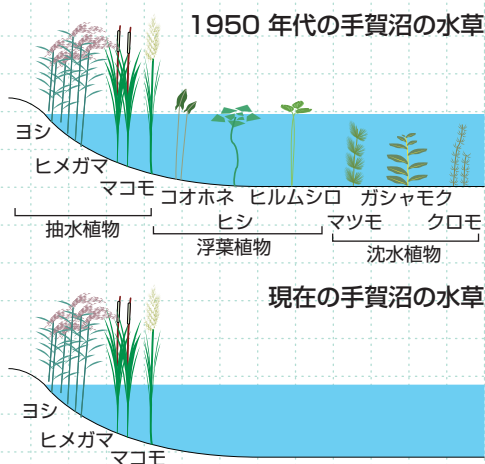


図4 手賀沼の水草の変化

*用語解説) [沈水植物] 体全部が水中にあって底に根をはる植物。

[抽水植物] 比較的浅い場所に生え、葉や莖が水面から出ている植物。